

編集後記

一〇一六年九月に第四号を刊行してから三年もの月日が経つてしまつたが、ここによく第五号を完成することができた。早くに原稿を下さつた執筆者の皆様、辛抱強く見守つてくださつた会員諸氏にお詫び申し上げたい。

今号は浦西和彦先生の追悼特集を組んだ。

本研究会の前身ともいふべき貴司山治研究会でお世話になり、その後、本研究会メンバーが中心になつて浦西先生所蔵資料を調査・撮影させていただくなど、直接の教え子ではない我々にいつも温かく接してくださつていった。先生のご逝去はあまりに大きな痛手であるが、この研究を後代に引き継ぐために何ができるかと考え、本特集を企画するに至つた次第である。諸氏の論考からは浦西先生のお仕事の幅広さ奥深さはもちろん、研究者としての立ち居振る舞いやお人柄もうかがえ興味深い。ベテランの方々には浦西先生のお仕事を

やく第五号を完成することができた。早くに原稿を下さつた執筆者の皆様、辛抱強く見守つてくださつた会員諸氏にお詫び申し上げたい。

以下、編集長兼元代表として述べることをお許しいただきたい。

占領開拓期文化研究会は一〇一〇年六月に設立され、本誌創刊号を一〇一三年三月に刊行した。この間、創立時の常任幹事（伊藤純・友田義行・内藤由直・村田裕和）が、代表・副代表・編集長を分担しつつ、会員の皆さんとの協力を得て会を運営してきた。

研究会活動は同志社大学・立命館大学を中心としつつ年々活発になり、ここでの切磋琢磨を経て学会にデビューする人も増えてきた。私も記憶があるが、初めての学会発表は緊張というよりも恐怖に近いものがある。私の場合、同日に発表した一人の先輩だけが唯一の顔見知りだったが、それでもどれだけ心強かったことか。もし、この研究会が他大学員会は、和田崇（編集長）、藤原崇雅、坂堅太、佐藤貴之の各氏と聞いている。一〇一八年度末をもつて研究会は一つの区切りを迎えたわけであるが、今後も新しい体制のもとで充実した研究活動が展開されることを願つて

立メンバーの一人として望外の喜びである。一方、創立時からのメンバーの多くが就職などで各地に散り、京都を拠点とする活動を十分にバツクアップすることが難しくなってきた。

そこで、一〇一八年度に常任幹事をのぞく古くからの会員諸氏に依頼して検討委員会を立ち上げてもらい、会の存続もふくめてゼロベースで議論してもらつた。常任幹事はこの議論に關して、一切口を出さないことを申し合わせた。

一年後、幸いにも会は存続する、雑誌も引き継ぐとの報告を受けた。新常任幹事は泉谷瞬・池田啓悟・高木彬・福岡弘彬の各氏で、代表は泉谷さんとのことである。また編集委員会は、和田崇（編集長）、藤原崇雅、坂堅太、佐藤貴之の各氏と聞いている。一〇一八年度末をもつて研究会は一つの区切りを迎えたわけであるが、今後も新しい体制のもとで充実した研究活動が展開されることを願つて

いる。

以上のような経緯により、一〇一九年四月より新体制での運営がスタートしているが、

この第五号の発行は二〇一八年度の事業であるため、旧編集委員会が刊行までの責任を負うこととなつた。本誌の奥付が「二〇一九年三月二〇日発行」となつてるのはこのよう

な事情によるものである。会員および読者諸氏のご了解を願う次第である。また特に、本誌掲載の藤原崇雅氏の論文「古典解釈の弁証法」は二〇一八年九月二七日に、資料紹介「武

田泰淳「日本文学的命運」の紹介と翻訳」は

同年二〇月二十四日に受理したものであること

を明記しておきたい。編集作業の大遅れ

により、早くに原稿を提出された藤原氏に多

大なご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げる。(村田)

▼研究会活動記録

第23回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一六年八月二〇日(土)

会場 立命館大学衣笠キャンパス 清心館

501号教室

・岩本知恵「安部公房「赤い繭」——変形する皮膚、変形する身体認識」

・朴仁聖「中野重治「雨の降る品川駅」——

改造版への考察を中心に――

栗山雄佑「目取真俊『面影と連れて』論

日程 二〇一七年三月二十五日(土)

――暴力への怒りを生み出す身体について

会場 ウィングス京都 ビデオシアター

――

・伊藤純「作家同盟第二回大会での〈芸術大衆化論争〉の再燃——新発見資料・貴司山治自筆提案書をめぐって」

八原瑠里「頭ならびに腹」論

秋吉大輔「受験雑誌『高3コース』『高1コース』における詩行為——寺山修司の『文芸欄』」

・藤原崇雅「武田泰淳『風媒花』論——J·P·サルトル『自由への道』の影響をめぐって

・泉谷瞬「皆川博子「トマト・ゲーム」論」

・小玉健志郎「田沢稻舟「唯我独尊」論」

・坂堅太「戦後アヴァンギャルドのみた大衆社会——「記録芸術の会」の〈大衆〉観について――」

・坂崎恭平「永井荷風『冷笑』論——プレテ

・伊藤純「物語」と「読者」を繋ぐものについての考察——中野重治「春さきの風」、

小林多喜一「チガミ」、村上春樹「蟹」から

・中井祐希「横光利一「厨房日記」論」

・加藤大生「パン・フォーカス」の歴史認

第25回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一七年八月二七日(日)

会場 同志社大学室町キャンパス 寒梅館6階大会議室

・坂堅太著『安部公房と「日本」植民地／占領経験とナショナリズム』(和泉書院)

(コメンテーター)岩本知恵、内藤由直(著者)坂堅太

識——花田清輝「画人伝」論

一回経過報告

林麗婷「小田嶽夫『望郷』試論」

第27回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一八年一月二一日（日）

会場 立命館大学衣笠キャンパス 清心館
503号教室

・ヴレタ・ダニエル「武田麟太郎「ある除夜」

について」

・藤原崇雅「武田泰淳『中国忍者伝 十三妹』

における白話小説の受容」

・轟原麻美「『明治百年』における小説と歴史学——司馬遼太郎『坂の上の雲』論」

第29回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一八年八月二六日（日）

会場 立命館大学衣笠キャンパス 究論館ブ
レゼンテーションルーム

・佐藤貴之「伊藤整「鳴海仙吉」のアイロニー

——「得能五郎」との関係から」

・松井佑生「吉井勇日記を通して見る占領期

京都」

・栗山雄佑「〈証言〉と〈ノイズ〉をめぐつて——沖縄文学における性暴力の記憶」

第五号編集委員／泉谷瞬・白井かおり・鳥木圭太・藤原崇雅・村田裕和（編集長）

第28回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一八年三月二十五日（日）

会場 同志社大学今出川キャンパス 弘風館
47番教室

・奥村華子「語／騙られる炭鉱——井上光晴『虚構のクレーン』を中心にして」

・井上大佑「ゲストからキャストへ——筒井

康隆「ベトナム観光公社」論

・伊藤純「『プロ運動資料集を読む』の紹介——山田清三郎アンケートを読む会第一回

第30回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一八年一二月二九日（土）

会場 同志社大学室町キャンパス 寒梅館6
階会議室

・王洋「阿部知二の『上海もの』における新女性——田村俊子・閲露・雑誌『女声』との関連性を手がかりに——」

・森祐香里「池田みち子『腐肉』論」

・倉地悠「吉行淳之介『決闘』に見る病いの実体化のプロセス」

フェンスレス 第5号

2019年3月20日発行

編集兼
発行人 占領開拓期文化研究会代表 村田裕和

発行所 北海道教育大学旭川校 村田裕和研究室内
占領開拓期文化研究会

(〒070-8621 北海道旭川市北門町9丁目)

ホームページ <http://senryokaitakuki.com/>

ブログ <http://senryokaitakukibunka.blog.fc2.com/>

メール senryokaitakukibunka@gmail.com

印刷所 洛西プリント社